

『発心集』の冒頭語について

新間水緒

はじめに

『発心集』を巻一第1話から順に読み進めて行くと、説話の語り出し方にある一定の型があることに気付かされる。例えば巻一の説話だけを見ても、(1)「昔」玄敏僧都と云人有けり(巻一第1話)、「中比、山に平等供奉と云て、止ごとなき人ありけり」(同第3話)、「近比、天王寺に聖有けり」(同第一〇話)のように(傍線筆者、以下同)、説話の時代を提示する語(以下、森下要治氏が提案された「時代提示語」の語を用いる⁽¹⁾)から話が始まる場合、(2)「伊賀国に、或郡司のもとに、あやしげなる法師の…」(同第2話)、「小田原と云寺に、教懐聖人と云人ありけり」(同第7話)、「神楽岡の清水谷と云処に、仏種房と云て、貴き聖人有き」(同第9話)のように、場所の提示から話が始まる場合、(3)「千観内供と云人は、智証大師の流、並なき智者也」(同第4話)、「僧賀

上人は経平の宰相の子、慈恵僧正の弟子也」(同第5話)、「或人、円宗寺の八講と云事に参りたりけるに」(同第8話)のように、人物紹介(話の主人公、または語り手の紹介と状況説明)から始まる場合の三つの型がある。

このうち(1)時代提示語については、志村有弘氏、野村卓美氏、森下要治氏などによって、「昔」・「中比」・「近比」の語が示す一定の年代があることが指摘されている⁽²⁾。特に野村氏は、編者長明が意識的に付加したものであり、「過去を善きは、仏道の時代とし、漸次世界や人心が下落してゆく」「類落史観」を示すものであること、『摩訶止観』の説く名利を捨てよとの教えが、『発心集』に収められた説話の「全時代を貫く」思想となつているとの見解を示されている⁽³⁾。時代提示語については、確かにご指摘の通りであると思われる。しかし『発心集』の各説話の書き出しに上記のような三つの型があるこ

とを考慮すると、ことは時代提示語の問題だけに留まらないのではないかと思う。『発心集』を編纂するにあたって、編者長明がこれらの冒頭語を書き分け、使い分けた理由、あるいは意味があるのではないだろうか。(1)の時代提示語も、単に長明の時代認識を示すだけの役割に留まらないのではないかと思うのである。

以下、本稿では、『発心集』の各説話が持つ冒頭語を手掛かりに、説話の「語り出し方」の意味と、それが『発心集』という説話集にどのように関わっているのかについて、考察してみたい。

一 『発心集』の冒頭語―時代提示語―

周知のように、『発心集』には八巻の流布本系統と五巻の異本系統の伝本がある。異本系統に収載されている説話は、現存流布本系統と配列は異なるものの、流布本系統の巻六までに載せられている説話と共通する話が存在することから、本稿では、まず流布本系統の巻六までの説話の冒頭語について考察することにした。使用する本文としては、流布本系統は、慶安四年版本の片仮名を平仮名に改め、私に句読点、濁点をほどこして用いることとする。また本文の明らかな誤

りは訂正し、適宜寛文十年版本を参照する。また異本系統は神宮文庫本を用い、適宜素行文庫本を参照することにする。⁽⁴⁾一話の区切りについては、現存流布本の表題と区切りに随い、流布本・異本間で説話の区切り方が異なる場合(巻二第11・13話)については、関係する箇所で言及することにした。以下、巻番号を漢数字で、説話番号を算用数字で表示する。

『発心集』の説話には、一話の中に関連する事項や人物の逸話などが複数存在する場合があるが、本稿で「冒頭語」とするのは、一話全体の最初の書き出しの部分である。説話に付加される関連話や評論部分も含めて全体で一話とみなし、付加部分の書き出しはとらない。付加部分の書き出しにも時代提示語や、場所・人物の紹介から始まる場合があるが、あくまでも主題を示す説話に関連して付加された部分と解する。ある主題に関連する事柄や人物の逸話等を、主題を示す説話に続けて記す場合、表題に「付」と副題を付ける場合と、つけない場合がある。いずれの場合も、主題説話の主人公とは別人について述べる際に、流布本は無改行で続ける場合が多く、異本は改行して書くことが多い傾向にあるが、説話中で改行されていても、本稿では一つの表題のもとにまとめられた付随説話として扱うことにする。

まず冒頭語が時代提示語の場合を見ていく。『発心集』の時代提示語については、「昔」「中比」「近比」(近來・近き世)の三分が用いられており、志村有弘氏が指摘されたのは、以下のような年代設定である。⁽⁶⁾

「昔」 ……八〇〇年代中葉まで

「中比」 ……九〇〇年代後半から一一〇〇年代のごく初期

まで(概して一〇〇〇年代)

「近比」 ……一一〇〇年中葉以降

野村卓美氏は、同類話との比較から、これらの時代語は『発心集』が独自に付加したものであると指摘されている。また年代に矛盾のある話があり、例えば一・6 高野南筑紫上人の話は、白河院(一一二九年歿)の「帰依し給ける」人でありながら「中比」のこととしているのに対し、三・2 伊予僧都大童子往生話では、「白河院の末」の話としながら「近き世の人」と記していることを指摘され、白河院の時代が「中比」と「近比」の分岐点であったのであろうかと述べられている。⁽⁷⁾

『発心集』巻一～巻六の説話の冒頭語で、時代提示語が用いられている例をみると、「昔」については、以下の説話が上げられる(表題に付された振り仮名、送り仮名、副題は省略した)。

一・1 玄敏僧都遁世逐電事(八一八年歿)

二・12 舍衛国老翁不顕宿善事

四・6 玄寶係念亜相室事

五・14 勤操憐榮好事(八二七年勤操歿)

この中で、二・12は、異本では二・11の付随説話として、二・13とともに一話扱いされている。内容的にも相互に関連があり一話として扱っても差し支えないと思われるので、今は扱いを保留しておく。他の例は、志村氏のご指摘のように、八百年代中葉までの話である。

次に「中比」が冒頭語にある話は以下の十五例である。

一・3 平等供奉離山趣異州事

一・6 高野南筑紫上人出家登山事(異本「中比」ナシ)

二・10 橘大夫発願往生事(異本「中比」ナシ)

三・1 江州増叟事

三・11 親輔養兒往生事

四・1 三味座主弟子得法華經驗事(異本欠)

四・5 肥州僧妻為魔事

四・10 詣日吉社僧取奇死人事

五・1 唐房法橋発心事

五・2 伊家并妾頓死往生事(異本欠)

五・4 亡妻現身帰来夫家事（異本「近來」）

六・1 証空替師命事

六・8 時光・茂光数奇及天聰事（異本欠）

六・9 宝日上人詠和歌為行事（異本欠）

六・10 室泊遊君吟鄭曲結縁上人事

「中比」の冒頭語が示す時代で、最も古いのは、一・3平等

（十世紀後半の人）⁽⁸⁾で、最も新しいのは、一・6の南筑紫上人

（一一〇四年春往生）である。一・6と二・10は、流布本では

「中比」であるが、異本では「中比」の語を欠いており、一・

6は、異本では「高野に」という場所から、また二・10は、「常

磐の橋大夫守輔といふ者有けり」という人物紹介で始まる話

となつている。この流布本・異本間の異同の問題について考

えておきたい。

一・6の南筑紫上人は、『三外往生記』・『高野山往生伝』に

は、長治元年（一一〇四）春に往生したとされるが、異本の

ように冒頭語の「中比」を欠いていると、白河院時代の人（白

河院の帰依し給ける人）として年代的な矛盾はなくなり、三・

2伊予僧都大童子往生話中にあるように、「白河院の末」「近

き世の人」であるということになる。さらに五・4亡妻現身

帰来夫家事は、流布本では「中比」、異本では「近來」とな

っているが、文中で澄憲法師が「近き世の不思議なり」と「人にかたられ侍りしなり」（傍点筆者。以下同）とあって、過去の助動詞「き」が用いられており、長明が澄憲（一一〇三年歿）の話を又聞きしたのであれば、ほぼ同時代人である澄憲にとつての「近き世」の語に、異本では「近來」の語が使用されたということになる。三・2の話のように白河院時代を「近き世」とするならば、この話も白河院時代の話ということになろう。野村卓美氏が「白河院の時代を「中比」と「近比」の分岐点と考えていたのであろうか」と指摘されているが、長明を含む鎌倉前期の人々にとつて、白河院の時代は、⁽⁹⁾

「中比」「近比」の境界が不分明な時代であり、その「揺れ」が書写伝来の過程で流布本「中比」、異本「近比」の時代提示語の相違に現れたのではないだろうか。五・4話後文の「近

き世の不思議」は両系統とも一致しており、この話は白河院

時代を想定していると考えてよいであろう。また二・10は、

異本では「中比」を欠いているが、橋大夫は「永長元年の秋」

（一一〇九六）に往生したと文中に記されている（流布本は「永

長の秋」。永長は「中比」で始まる六・8話と同じ堀川天皇

の御代であり、流布本のように「中比」の語があっても矛盾

はなく、異本側の脱落の可能性が考えられる。

以上の点から、「中比」の冒頭語が現す時期は、志村氏のご指摘通り、「九〇〇年代後半から一一〇〇年代のごく初期まで（概して一〇〇〇年代）とするのが妥当と思われる、長明はかなり意識的に説話の年代を表示していることが窺える。

次に「近比（近来・近き比・近く・近き世）」の時代提示語を持つのは、以下の通りである。

- 一・10 天王寺聖隱徳事
- 二・1 安居院聖行京中時隱居僧值事
- 二・5 仙命上人事
- 二・8 真浄房暫作天狗事
- 三・5 或禪師詣補陀落山事（流布本「近く」、異本「近比」）
- 三・8 蓮華城入水事（異本「近き比」）
- 三・9 樵夫独覚事
- 五・5 不動持者生牛事（流布本「近く」、異本「中比」）
- 五・13 貧男好差凶事（両系統とも「近き世の事にや」）

「近比」の時代提示語で異本と異なるのは、五・5 不動持者生牛事で、流布本は「近く」、異本は「中比」となっている。五・5の内容から説話年代を特定するのは困難で、両本間で異なる理由も見出せない。前話五・4にも異同があり、本文の流動が考えられる。この話がこの位置に置かれたのは、

前話が転生せず現身で戻ってきた亡妻の話であり、後話が少納言公経の転生譚であるという主題の關係であろう。「近比」で最も古いのは五・8 鳥羽僧正（一一四〇年歿）、最も新しいのは、三・5の「讃岐の三位」に比定される人物中、長明の時代に最も近い藤原俊盛（一一七七年出家、五八歳⁽¹⁾）である。三・8 蓮華城の入水事件もそのころのことであった⁽²⁾。以上のように、巻一―巻六の冒頭語で「近比」とされるのは、志村氏のご指摘のように千百年代中葉以降であることが確認できる。

この他に、時代を表す冒頭語としては、以下のように、天皇名で表記する場合三例と、元号で表記する場合が一例ある。

- 二・3 内記入道寂心事 村上御世に（村上院ノ御世ニヤ）
- 三・6 或女房參天王寺入海事 鳥羽院の御時
- 六・3 堀川院藏人所衆奉慕主上 堀川院位におはしましける時（異本欠入海事）
- 二・9 助重依一声念仏往生事 永久ノ比（流布本は承久。永久が正しい）

二・3、三・6には、流布本・異本間の異同は見られない。これらの話は、二・3が「天曆の治」と称される村上天皇の時代の文人官僚の往生話であり、六・3は堀川院を慕って入水した藏人所の衆の話で、冒頭に次のような堀川院時代讚美の言葉が見える。この二つの時代は、長明にとって特に仰ぐべき理想の御代であったのであろう。

堀川院位におはしましける時、天が下おさまりて、民安く、世のどか也。ちかくは後三条院の御時などをこそ、いみじきために申ぬるを…唐には天宝のためしをひき、我国には延喜・天曆のかしこき御代に立帰る事をぞ、高きも賤きも悦けり。

二・9は、参照したと思われる『後拾遺往生伝』下8・『本朝新修注生伝』八（話番号は岩波日本思想体系『往生伝 法華験記』による）に「永久」の年紀があることによるのである。三・6「鳥羽院の御時」については、不明である。また卷二の保胤と定基の話は、『今鏡』卷一「昔語り・まことの道」と同文的同話であり、話の順序も同様に連続していることから、『発心集』が元にした資料であろうと指摘されている⁽¹³⁾。保胤の話は『今鏡』には時代を示す語句はなく、『発心集』が「村上御代」とした理由と考えられるのは、保胤が村上天皇皇子具平親王の師であったという記述であろう。この場合「発心集」が「村上御代」という時代提示語を付加したと考えられる。

これらの時代提示語を冒頭語に持つ話は、①時代提示語の後に「山に」（一・3）、「天王寺に」（一・10）のように場所が提示され、人物の紹介が続く場合と、②「鳥羽の僧正とて

やむ事なき人をはしけり」（二・8）、「讃岐の三位と云人いまそかりけり」（二・5）のように、次に場所の提示がなく、人物紹介がすぐ続く場合とに分けられる。時代提示語として天皇の御代を出す場合は、三例とも場所の提示はなく、人物紹介から始まるという特徴がある。

以上、『発心集』の冒頭語に「昔」「中比」「近比」その他の時代提示語を用いた例を検討してきたが、それらの冒頭語には明確な時代認識があり、かなり意識的に使い分けられていると言うことができる。

二 『発心集』の冒頭語―場所の提示と人物紹介―

次に冒頭語が場所から始まる場合について検討してみた。語り出しが場所から始まる例には、以下のようなものがある。

- *（ ）内は異本の冒頭語、本文を示す。傍線部は異同のある部分。
- 一・2 同人伊賀国郡司被任給事―伊賀国に、或郡司のもとに
 - 一・6 高野南筑紫上人出家登山事
山事
 - 一・7 小田原教壊（懐）上人
打破水瓶事
 - 一・9 神楽岡清水谷仏種房事
神楽岡の（方）二 清水谷と云処に
 - 一・11 高野辺上人偽儲妻女事
高野（山）の辺（麓）に

一・12	美作守顕能家人來僧事	美作守顕能のもとに
二・6	津国妙法寺樂西聖人事	津国〔撰津国二〕和田の奥に〔渡辺の郡二〕
二・7	相真没後返袈裟事	津国の〔欠〕渡辺と云所に
三・4	讃州源大夫俄発心往生事	讃岐〔ノ〕国に何れの郡とか〔三カ〕
三・7	書写山客僧断食往生事	播磨〔ノ〕書写〔ノ〕山に
三・10	証空律師希望深事	薬師寺に
三・12	松室童子成仏事	奈良に、松室と云所に〔僧有ケリ〕
四・4	叡実憐路傍病者事	〔叡〕山に
四・9	武州入間河沈水事	武蔵国入間河のほとり〔辺〕に
五・3	母妬女手指成蛇事	何の国とか〔ヤ〕
五・11	目上人参法成寺供養堅固道心事	河内国に
五・15	正算僧都母為子志深事	山に

場所については、国、寺、個人の家など様々である。特徴的なのは、同じ地名、あるいは関連する地名を連続させる場合があることである。例えば、二・6と二・7は同じ「津国」つながりであることは一見して明かであろう。また三・2、三・3の冒頭語は場所提示語ではないが、三・2話中に「伊予僧都」、三・3には「伊予入道」の語があり、続く三・4は「讃岐の国にいづれの郡とか」という冒頭語を持っている。さらに三・5にも「讃岐の三位」とあるように、この四話には四国の国名つながりがあると思われる、場所を提示する冒頭語を

持つ説話と隣接する説話同士が、場所を連想契機として繋がっている。冒頭語が場所から始まる説話は、「あやしげなる法師の…すぞろに入來るありけり」(一・2)、「教懷聖人と云人ありけり」(二・7)のように、その後には人物紹介の文が続く。

次に、説話の語り出しが直接人物紹介から始まる冒頭語には、①人物名の後に系譜や法脈等の説明が付される場合と、②その人物の状況が語られる場合がある。異本に欠く話が多いが、両本に共通するものに関して、多少の字句の相違はあるものの、本文に大きな異同はない。

まず、①の例であるが、以下のような話があげられる。

①人物名・系譜・法脈等が続く場合

- 一・4 千観内供通世籠居事
千観内供と云人〔云云〕は、智証大師の流〔ノ〕、並なき〔ヤゴト無キ〕智者也。
- 一・5 多武峰僧質上人通世往生事
僧質上人は、經平の宰相の子〔息〕、慈恵僧正の弟子也。
- 二・4 三河聖人寂照入唐往生事
〔此〕參河の聖と云は、大江定基と云博士、是也。
- 二・13 善導和尚見仏事
〔隨而〕唐の善導和尚は、道綽〔禪師〕の御弟子也。
- 四・2 淨藏貴所飛鉢事
淨藏貴所と聞ゆるは、善宰相清行の子、並びなき行人也。〔異本欠〕

五・8中納言顯基出家籠居事

五・8顯基

中納言顯基は、大納言俊賢の息、後一条御門に時めかしつかへ給て：

(異本文)

五・9成信・重家同時出家事

兵部卿致平親王の御子成信中將と、堀河右大臣の子にて重家の少將ときこえける人：(異本文)

八幡別当頼清が遠流にて、永秀法師と云もの有り。(異本文)

六・7永秀法師数奇事

この中で、一・4千観以外は『発心集』以前に同類話が存するが、それらの中で、『発心集』本文に近いと思われるものを、各説話ごとに上げると、以下の如くである。⁽¹⁵⁾

五・9成信・重家

権中納言源顯基は、大納言俊賢の御子なり。少き年より書に耽り学を好めり。(続本朝往生伝4) 中納言(顯基)、後一条院の覚えの人にておはしけるに、御忌におはして宮の内に御殿油も奉らず侍りければ：(今鏡卷一)「すべらぎ上・望月」 顯基中納言は後一条院の寵臣なり。天皇崩じ給ひて後「忠臣は二君に仕へず」と云ひて：(古事談一47)

一・5僧賀

二・4寂照

沙門増賀は、參議橘恒平卿の子なり。叡山に登りて止觀を学ぶ。慈惠僧正の弟子なり(続本朝往生伝12)

同(大江)定基は、齊光卿の第三の子なり。早く祖業を遂げて、過ぎて夕郎となる(続本朝往生伝33)

その三河の聖も博士におはして、大江氏の上達部の子におはしけるが：(今鏡卷九「昔語り・まことのみち」)

四・2淨藏

大法師淨藏は、俗姓三善氏、右京の人なり。父は參議宮内卿兼播磨權守清行卿、第八の子なり。母は嵯峨皇帝の孫なり(拾遺往生伝中一) 淨藏貴所、住山の時、鉢の法を行ひて、鉢を飛ばして過こしける比：(古事談三19)

これを見ると、『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』等、往生伝類を参照したと思われる場合(一・5僧賀、四・2淨藏、五・8顯基)と、主に『今鏡』をもとにしたと思われる場合(二・4寂照、五・9成信・重家)であることが注目される。一・5僧賀の場合は、説話内容は『法華驗記』下82、『今昔物語集』卷十二・33と一部においてほぼ一致するが、それらには詳しい系譜の記述はない。『続本朝往生伝』12には系譜の記述はあるが、説話内容は一部一致するに留まる。四・2淨藏の場合

合も同様に、内容は『古事談』三・19とほぼ同文であるが、系譜の部分は存在せず、系譜が書かれた『拾遺往生伝』中・1には飛鉢譚は見えない。また五・8 顕基の場合も、『続本朝往生伝』4には系譜部分があるが、叙述の順序が一致する『今鏡』には見えない。一方、二・4 寂照と五・9 成信・重家に關しては、既述のように『今鏡』との関係が指摘されている⁽¹⁶⁾。

このことから、元とする資料をそのまま使用する場合と、それに他の資料を加えて説話を構成する場合があったことが窺える。『発心集』に散見する「伝にあり」の記述が示唆するように⁽¹⁷⁾、系譜や法脈が付加された話の場合、長明はまず『往生伝』類を参照し、その上で同一人物に関する他の資料を見て説話を構成していくようなことがあったのではないだろうか。①に属する説話の主人公は、高僧か官人・文人として名高い人物の出家譚であり、僧伝の形式を採用したのと思われる。二・13 善導については、既述のように独立した一話ととらえてよいか問題があるが、出典は不明ながら形式としては僧伝であることと、文中に師弟関係が問題にされていることによるのであろう。六・7 永秀の場合は、『古事談』六・15に「八幡所司」とあって、石清水八幡宮関係者のようであるが、『古事談』は頼清関係記事を載せておらず、「八幡別当

頼清遠流」は『発心集』が付加したのかもしれない。本話の依拠文献にこの記述が存在したか否か不明であるが、永秀の数寄に欠かせない笛竹を得る便宜を図ってやったという説話内容に関わる事項であるので入れられた可能性がある。

次に②の例では、以下のような話がある。

②人物名（無名も含む）・状況説明が続く場合

一・8 佐国愛華成蝶事

二・2 禅林寺永観律師事

三・3 伊予入道往生事

四・3 永心法橋憐乞兒事

四・7 或女房臨終見魔變事

五・6 少納言公経依先世

願作河内寺事

五・7 少納言統理通世事

五・10 花園左府詣八幡祈

往生事

五・12 乞兒物語事

六・2 后宮半者悲一乗寺

僧正入滅事

或人、田宗寺の八講と云事に參（詣）りたりける（時）に

永観律師と云人ありけり（欠）。年来念仏の志深く（テ）、名利を思はず。

（重クセス）

伊予守源頼吉（義）は、若く（シテ）より罪をのみ（欠）作りて

永心法橋と云人、近比の事にや、清水（百日ま）いりける時（異本欠）

或宮腹の女房（ノ）、世を背けるありけり。

少納言公経と云手書有けり（異本欠）

少納言統理ときこへける人、年来世を背かんと思ふ志深かりしが（異本欠）

花園左大臣は、御形ち、心もちみ（欠）、身の才、調り給へる（タル）人也。

或る上人の（欠）、物へまかりける道に一乗寺の僧正、かくれ給て後（異本欠）

六・5 西行女子出家事
六・6 侍従大納言幼少時

止験者改請

六・12 郁芳門院侍良住武

藏野事

六・13 上東門院女房住深

山事

二・11 或上人不值客人事

四・8 或人臨終不言遺恨事

西行法師、出家しける時(異本欠)

侍従大納言成通卿、そのかみ、九歳

にてわらはやみし給けり(異本欠)

西行法師、東の方修行し(シアリキ)

ける時

或聖(リ)、都(ノ)ほとり(辺リ)

を厭(フ)こ、ろ深くて、(人モ通ヌ)

山陰クレナドニ)住ぬ(ム)べき所

やあると、尋ありきける程に(ケリ)

年来、道心深して(タテ)、念仏をこ

たらぬ聖(リ)ありけり。

年比、あひ知(タル)人ありき。

最後の二例は「年ごろ」が冒頭にくる例で、文中にこの語がある二・2(永観律師と云人あり。年来念仏の…)、六・6(侍従大納言成通卿、…年来いのりけるながし僧都…)と同様の文章構造と考え、人物紹介から始まる冒頭語と解した。この中で、『発心集』以前の同類話が明かなものは、三・3頼義、五・6公経、五・7統理、五・10花園左府で、それ以外は『古事談』に類話があつても、内容がかなり異なる場合(二・2永観)か、出所不明、長明の見聞譚らしきもの(四・8)である。同類話が明かな話は、文章構造がよく似ている三・3頼義(続本朝往生伝36)、五・6公経・五・7統理・五・10花園左府(今鏡)である。説話の元となる資料がある場合は、

原則的にその内容を踏襲していることは既に述べた。問題は、三・3頼義にしても、五・7、五・8の公経や統理にしても、『続本朝往生伝』や『今鏡』から年代がわかるはずであるのに、なぜ「中比」・「近比」等の時代提示語を付けなかったのであるうかということがある。やはり冒頭語については何らかの意図があつて、書き分けていると考えるべきであろう。

三 冒頭語の持つ意味

以上見てきたように、『発心集』の冒頭語は、(1)時代提示語から始まる場合、(2)場所の提示から始まる場合、(3)人物紹介から始まる場合に大きく分けることができるが、それぞれの場合の考察から明かなように、かなり意識的な書き分けがなされている。この三つのいずれの場合にも、人物紹介が続くことから、基本形は(3)人物紹介から始まる形で、それに何らかの意図を以て、時代提示語や場所表記を付加したと考えられる。問題はその「意図」である。可能性として考えられるのは、『発心集』の構成上の問題、つまり説話集の構想と編纂上の問題ではないかということである。そこでまず、巻一〜巻二の冒頭語と主題との関係を見ていくことにしたい。巻一は流布本・異本ともに存在し、第11話まで説話配列にも

異同がないこと、第12話以降はその続きとして、流布本の方が本来の説話配列を示していると考えられるからである。以下に、説話と主題との関係が分かり易いように各説話の表題を記し、冒頭語・主題等の関係を表示した。

○巻数字は巻、算用数字は説話番号を示す。()内は冒頭ではなく、文中に記されている時代提示語、*は、異本に欠けていることを示す。

表題	時代	場所	人物紹介	主題・連想
一・1玄敏僧都遁世逐電事	昔			遁世逐電
一・2同人伊賀国郡司被仕給事		伊賀国に		同・僧都
一・3平等供奉離山趣異州事	中比	山に		同・内供
一・4千観内供遁世籠居事			千観内供と云人は智証大師の流、並なき智者也	遁世籠居 内供
一・5多武峰僧質上人遁世往生事			僧質上人は経平の宰相の子、慈恵僧正の弟子也	遁世籠居 断執
一・6高野南筑紫上人出家登山	中比*	高野に		遁世断執
一・7小田原教壞打破水瓶事 付陽範阿闍梨切梅木事		小田原と云寺に		断執成功 梅の木
一・8佐国愛花成蝶事 付六波羅寺幸仙愛橘木			或人、円宗寺の八講と云事に参りたりけるに	断執失敗 花・橘の木
一・9神楽岡清水谷仏種房事		神楽岡の清水谷と云処に		断執 市井の聖
一・10天王寺聖隱徳事 付乞食聖事	近比	天王寺に		隱徳 市井の聖
一・11高野边上人偽儲妻女事		高野の辺に		隱徳・偽悪
一・12美作守顕能家人來僧事に		美作守顕能のもとに		隱徳・偽悪

表題	時代	場所	人物紹介	主題・連想
二・1 安居院聖行京中時 隠居僧値事	近比	安居院に	永観律師と云人ありけり	隠徳隠居 臨終善知識
二・2 禪林寺永観律師事			永観律師と云人ありけり	隠徳隠居・臨終 善知識 Ⅱ 異本
二・3 内記入道寂心事	村上御代に			文人往生
二・4 三河聖人寂照入唐往生			參河の聖と云は、大江定基と云博士、是也	文人往生
二・5 仙命上人事并覺尊上人事	近來	山に		往生予知
二・6 津国妙法寺楽西聖人事		津国和田の奥に		往生予知・津国・蓮 ・仏法の不思議
二・7 相真、没後返袈裟事	(そこに近比)	津国渡辺と云所に		蓮糸袈裟往生・津国 ・仏法不思議・師弟
二・8 真浄房、暫作天狗事	近來		鳥羽の僧正とてやん事なき人をはしけり	往生失敗・師弟・鳥羽僧正
二・9 助重依一声念仏往生事	永久の比			一声念仏往生・鳥羽僧正
二・10 橘大夫、發願往生事	中比(永長の秋)	(常磐の)	常磐橘大夫守助と云者ありけり	願文往生

まず、一・1話から二・1話までを見ると、時代提示語が昔↓中比↓近來の順に配列されていることが注目される。二・2の登場人物は永観(一〇三三〜一一二二)で、時代的には文中にもあるように、白河院時代の人であり、『発心集』の時代提示語では「中比」・「近比」の認識が曖昧な「近き世」の人である。時代提示語を欠くのは、年代順とは異なる基準

『発心集』の冒頭語について

による配列の可能性が考えられる。(18)次に二・3話の「村上御代」から二・9「永久のころ」(鳥羽院の時代・近比)まで続く時代配列が続き、さらにその後には二・10「中比」に始まり三・9「近き比」で終わる話群がある。この話群をⅠ・Ⅱ・Ⅲとして、それぞれの話群を主題との関連から見ると、Ⅰは玄敏や平等などの遁世譚で、逐電・籠居・断執・隠徳と

いった「遁世の諸相」をテーマにしており、続くIIの二・三保胤から二・9助重までは、保胤や三河入道のような文人の往生、蓮の糸で作られた不思議な袈裟の師資相承による往生、真浄房と鳥羽僧正の話（三・8）のような師弟間のあり方により往生が成功したり失敗したりする話など、様々な往生のすがた（相）が語られており、これも「往生の諸相」という主題でまとめられよう。注目されるのは、保胤の話が「村上御代」で始まっていることである。これは、この話が当初の時代提示語の話群（一・1昔から二・8近來まで）の中には存在せず、『今鏡』で後続する二・3三河入道説話とともに、後の段階で入れられたことを示すものではないだろうか。「村上御代」であれば、「中比」としてもよい話であるが、既述のように、長明には「村上御代」に特別な思いがあったと考えられ、また前後に「近比（來）」があるため、二・8まで続く時代提示語の順序に矛盾しないように配列する意図があったのではないかと思う。おそらく長明は、説話を主題ごとに分けて配列することを考え、まず同じ主題でまとめられる説話に時代提示語を付し、年代順に配列して骨格となし、その次に、すでに配列した説話の間に場所や主題、事項等で関連する説話を挿入していったのではないだろうか。そのように

考えると、II話群の最後に位置する「永久の比」の時代提示語を持つ二・9助重の話も、「近比」の時代提示語を持つ二・8の鳥羽僧正との関係（かの僧正の年比の行徳）で、二・8の話に後続して後の段階で入れられたものと推定される。一方で、この話は主題的には次の二・10「願文往生」（様々な往生の行業）との関連も考慮されているようである。二・10の文中に「永長の秋」と入れたのも、二・9から続く元号表示を考慮したのではないだろうか。三・6「鳥羽院の御時」（「近比」の時代）も、三・5補陀落渡海（「近く」の冒頭語を持つ）の話との関係（入水往生）で、後に入れられたものである。話群IIIは、二・10橘大夫（中比）から三・10薬師寺証空（異本は証玄）までで、「様々な往生の行業」（二・9「一声念仏往生」からの続きであり、願文往生・客人に面会せず・云ふかひなく功積める者・身燈・入海・山中独覺等々）という主題でまとめられている。

時代提示語を骨格として全体の構想を考えた後、それぞれの話群の中に同主題か、関連する主題を持つ話を配列していくために次に用いたのは、場所を提示する冒頭語であったと考えられる。場所の提示から始まる冒頭語を持つ話が、時代提示語の次に場所が提示される話（前述した時代提示語を冒

頭語とする型の①)の前後に置かれる例が散見されるからである。例えば、先に示した表で見ると、一・三話「中ごろ山に」の前に一・二話「伊賀国にある郡司のもとに」で始まる玄敏の話があり、一・六話「中比高野に」の次には「小田原と云ふ寺に」で始まる一・七話が置かれている。一・六は、異本では「中比」を欠くが、この場合「中比」という時代提示語がなくても、「高野に」という場所提示語によって一・三、一・七に繋がる。さらに、一・10「近比天王寺に」の前には一・9「神楽岡の清水谷に」という場所を示す冒頭語が、また次の一・11話から二・1「近比安居院に」まで、場所から始まる冒頭語の話が続くのである。このことが意識的に行われたと思われるのは、二・6と二・7がよい例であろう。二・6話は「津国の和田の奥に」ではじまり、二・7話も「津国渡辺と云所に」と続くが、二・7話はこのあと「そこに近比」という語句が入る。「近比」の話であることが分かっておりながら、冒頭に置かなかつたのは、「津国」という場所の関連を優先したからであろう。

このように、まず時代提示語を持つ冒頭語によって同じ主題を持つ説話を時代順に並べていき、次に場所から始まる冒頭語を持つ説話を挿み、最後に時代提示語も場所も持たない

説話を、前後の話の主題や関連事項等で挿入して最終的な説話構成にしたのであろう。冒頭語の書き分けは、単に長明の時代認識を示すだけでなく、『発心集』編纂上の大きな要素となっていたと考えられる。紙数の関係で詳細を示すことはできないが、長明の当初の構想は、以下のようなものであったと推定される。(一)内は、後の段階で入れられたと思われる説話を示している。

I 遁世修行の諸相(様々な遁世修行)

*は異本欠

一・1 玄敏僧都遁世逐電事	昔	隠通・逐電・僧都
一・3 平等供奉離山趣異州事	中比	遁世逐電・供奉
一・6 高野南筑紫上人出家登山事	中比	隠通・断執
一・10 天王寺聖隱徳事	近比	隠徳・市井の聖
乞食聖事		
二・1 安居院聖行京中時	近比	隠徳・隠居・臨終善知識
隠居僧值事		
(二・2 禪林寺水観律師)	(人物)	隠遁隠居(異本臨終善知識)

II 往生の諸相(様々な往生)

(二・3 内記入道寂心事)	村上御代	文人の往生
二・5 仙命上人事并覺尊上人	近來	往生予知
二・8 真浄房、暫作天狗事	近來	往生失敗・師弟・鳥羽僧正
(二・9 助重依一声念仏往生事)	永久の比	一声往生・鳥羽僧正

Ⅲ 往生の行業（往生のための様々な行業）

二・10 橋大夫発願往生事	中比	願文往生
三・1 江州増叟事	中比	物にふれて理を思うこと
三・5 或禪師詣補陀落山事 賀東上人事	近く （異本 近來）	身燈・入海
三・8 蓮華城入水事	近き比	入水・往生失敗
三・9 樵夫独覚事	近き比	山中独覚

Ⅳ 法華經靈驗功德・比叡山僧

三・11 親輔養兒往生事	中比	兒の往生・法華經説誦
四・1 三昧座主弟子得法華 經驗事*	中比	童子奉仕・法華經説誦 仙人
（四・3 水心法橋憐乞兒事）*	（人物・状況）	法華文句記・比叡山僧
（四・4 叡実隣路傍病者事）	（山に）	・病者への憐れみ
四・5 肥州僧妻為魔事	中比	病・女性の妨げを退ける

Ⅴ 様々な機縁（男女・母子・夫婦の恩愛・転生）

四・6 玄寶懸念大納言室事	昔	不浄観・女性の妨げを 退ける
四・10 詣日吉僧取奇死人事	中比	慈悲・死体葬送
五・1 唐房法橋発心事	中比	死体葬送・恩愛を契機 に出家・途絶えた男女
五・2 伊家并妾頓死往生事	中比	恩愛を契機に往生・出 家・途絶えた男女
* 五・4 亡妻現身帰夫事家	中比	男女の深き志・深き志 で仏に値遇せんと願う べし・現身で還る

五・5 不動持者生牛事

五・5 不動持者生牛事	近く	仏に値遇せんと望むべし。転生して還る
（五・12 乞兒物語事）	（人物・状況）	乞兒・翁等のはかなき 望み。極楽望むべし。
五・13 貧男好差図事	近き世のこ とにや	老男の空しき差図書 き。極楽望むべし。

Ⅵ 恩(1)（傳育の恩・師恩・主恩）

五・14 勤操憐榮好事	昔	傳育の恩
六・1 証空替師命事	中比	傳育の恩・師恩
（六・3 堀川院藏人所衆奉 主上慕入海事）*	堀川院位におは しましける時	主恩

Ⅶ 恩(2)（継母継子・養母養女・童と師僧）

六・4 母子三人賢者遁罪事	昔	継母と継子の愛情、兄弟
（六・5 西行女子出家事）*	（人物・状況）	養母と養女・父と娘・兄弟
（六・6 従大納言幼少時止 驗者改請事）	（人物・状況）	童と師僧・いみじき数寄人

Ⅷ 数寄と往生、深山・廣野の閑居

（六・7 永秀法師数寄事）*	（人物・系譜）	数寄者は深き罪を犯す ことはない・笛吹き
六・8 時光・茂光数寄及天 聽事*	中比	笙吹き・箏築師、数寄 は厭離の便り
六・9 宝日上人詠和歌行事	中比	和歌を詠じて行とする
* 六・10 室泊遊君吟鄭曲結縁 聖人事	中比	鄭曲を詠じて結縁（数 寄による結縁）
（六・11 乞者尼得單衣奉加寺事）	（人物・状況）	和歌を添えて奉加・宮 仕人

(六・12 郁芳門院良待住武藏野事)

(人物・状況)

郁芳門院の侍の通世
行・武藏野の花・庵・
曠野での修行

(六・13 上東門院女房住深山)

(人物・状況)

上東門院の女房の通世
修行・切花のから・庵
・深山での修行

以上、『発心集』巻一から六までの構想を、冒頭語の観点からみてきたが、まとめると以下ようになるであろう。

先ずIで、名利から遁れるために、逐電・隠徳・籠居・断執を断行した偉大な先達たちの姿を、往生に失敗した者の話を交えながら語り、次にIIで文人・官人・女房・地方在住者等の様々な往生の様子を述べつつ、一方で予想外のことから往生に失敗した事例(真浄房)をあげる。さらにIIIでは往生した人々がどのような行業を修していたのかを述べ、往生の行は人それぞれが因縁によって選び取ったものであり、どのような行業であれ誇ってはならないと説く。IVでは法華経の功徳を強調し、さらにVでは、男女の別れや身近な人の死を機縁として発心した者、臨終正念に成功し往生した者、不首尾に終わった者などの事例が語られる。VI・VIIでは親子・師弟間の傳育の恩に加え、恩は実の親子の間だけでなく、継子・継母の間、養母・養女の間にも、兄と師僧との間にも存在す

ると語り、さらにVIIIでは、長明にとって最も関心が高かったと思われる数寄と往生の問題で自論を展開し、最後に曠野や深山での理想的な閑居と修行生活の話で語り収めている。

このように見ると、序文にも書かれているように、『発心集』は「発心」のあり方についての様々な事例を集めたものであり、かつそのような事例について、順を追って長明の見解や考察を述べたものである、とあらためて認識する。特に巻六末に集められた数寄説話については、「此世のこと思ひ捨てむ事も、数寄はことにたよりとなりぬべし」(六・8)数寄は「出離解脱の門出」(六・9)、鄭曲による結縁(六・10)など、長明の数寄に対する肯定的見解が顕著に認められるもので、これらの話が時代提示語を冒頭においていることから、当初から構想の中に入れられていたものと思われる。また巻六巻末に置かれた曠野・深山での理想的な閑居・修行生活の話が構想の後の段階で入れられたものとの推定が当たっているならば、『方丈記』の最終章で「心」が答えなかつた問題の答えが、巻六末に至って導き出されているとも言え、序文から追求してきた問題に、ここで一つの結論を出しているように思われるのである。異本が収める説話が、跋文風評論も含めて流布本の巻六までであるのは、このような『発心

『集』の当初の構想が卷六までで一応の完結をみたことを示唆しているのではないだろうか。なお、異本が数寄説話を三話とも欠きながら、廣野や深山での修行の話を一話とも入れていることが異本書写者の選択によるものであるとすれば、異本の性格の一端を示すものでもあろう。それについては、二系統間の説話の出入りについて、改めて検討する必要があると思う。

四 卷七・卷八の問題

卷七・八も、卷六以前と同様の冒頭語が見られる。卷六以前と同様に、時代提示語を手掛かりに主題との関係を見て行くと、以下のような話群に分けられる。

I 極楽往生の先達

(七・1 恵心僧都調空也上 人事)	(人物・状況) 空也の教え
(七・2 同上人脱衣奉松尾 大明神事)	(人物・状況) 法華經と念仏は極楽の業

II 様々な行業による往生

七・3 中将雅通持法華經往 生事	中比・人物 法華經説論・法華經札贊
七・4 賀茂女持常住仏性四 字往生事	中比・人物 「常住仏性」による往生
(七・5 太子御慕覚能上人 好管絃事)	(太子の御慕に) 管絃・風月による往生

III 様々な機縁

(七・6 賢人右府見白髮事)	(人物・状況) 夢に白髮丸を見る
七・7 三井寺僧夢見貧報事	中比三井寺に 夢に貧報の冠者を見る
(七・8 道寂上人詣長谷祈道心事)	(元興寺に) 夢告により道心を知る
(七・9 恵心僧都随母心遁世事)	(人物・状況) 母の教えにより発心
七・10 阿闍梨実印大仏供 養時減罪事	東大寺の大仏供 養の時・状況 信を發す

IV 地方官・有力者の遁世修行・不惜身命

七・11 源親元普勸念仏往生事	中比・人物 普く念仏を勧め、往生
七・12 心戒上人不留跡事	近く・人物 不惜身命・大仏の聖
(七・13 齋所権介成清子住 高野事)	(尾張国中 嶋郡に) 不惜身命・大仏の上人 (今の世の事)
V 隱徳の勧めと墮天狗道	
八・1 時料上人隱徳事	中來筑前国に 隱徳を貫き往生
(八・2 有上人為名聞建堂 作天狗事)	(或山寺に) 無き徳を称し、天狗と なる(今の事なれば)
八・3 仁和寺西尾上人依我 執燒身事	近世のことに 名聞のために燒身し、 天狗となる

VI 善悪につきて発る心

八・4 橘逸勢女子至配所事 昔・人物 深き志
 (八・5 盲者関東下向事) (状況・場所) 深き志・懇ろなる悲願
 八・6 長楽寺尼願不動験事 近來南都に 信ずる者に起くる不思議
 八・7 或武士母怨子願死事 近比・人物 心は善悪につきておこる
 八・8 老尼死後為橘虫 近比・人物 悪心の強さ

VII 神明の思召

八・9 四条宮半者呪詛人為 中比・人物・ 悪心を発し乞食の報を
 乞食事 状況 得る
 (八・10 於金峯山犯妻者経 (状況・人物) 神を軽んじ罰を蒙る(近
 年為盲事) き世のこと)
 八・11 聖梵・永朝離山住南 中比奈良に 春日社に現世を祈り、後
 都事 世を祈れとの夢告を得る
 八・12 前兵衛尉、遁世往生 近く・人物 賀茂社に現世を祈り、夢に
 事 阿弥陀仏を見て出家往生
 (八・13 或上人於放生神供 (人物・状況) 賀茂社の神供の鯉を放
 鯉夢中被恨事) ち恨まれる
 八・14 下山僧於川合社前絶入 中比の事にや 神は論義を悦ぶ
 事 状況・人物

卷七以降も時代提示語・場所・人物紹介・状況説明による

説話構成が見られるが、いくつかの相違点も見られる。一つは、卷一から卷六までの各巻冒頭が時代提示語で始まっている(前掲表参照)のに対し、卷七冒頭にはそれが見られないことである。現存『発心集』の各巻の分冊が当初からのもの

『発心集』の冒頭語について

か、後人の手によるものか不明であるが、少なくとも現存流布本のような形になった時点で、各巻冒頭に時代提示語が置かれたと考えられる。その点から見ると、卷七冒頭の二話は例外となる。七・3に「中比」の語があることから、当初卷七は第3話から始まっていたのかもしれない。卷七冒頭の二話の内容は、空也が源信に「厭離穢土、欣求浄土」を教え、源信はそのことを重んじて『往生要集』に書いたこと、空也は「我が国の念仏の祖師」であり、法華経と念仏を極楽の業として往生を遂げたことが語られている。「厭離穢土、欣求浄土」については、卷六末の六・13話に「厭穢土、欣浄土事」の副題が付された跋文風評論があり、卷七冒頭の二話は、卷六と卷七以降の橋渡しの目的でここに置かれたとも考えられる。もう一つの理由としては、卷一冒頭で玄敏を始めとした遁世の偉大な先達たちの足跡をたどったように、卷七から始まる部分の冒頭に極楽往生の偉大な先達の二人をおいたのではないかということである(これについては後述する)。

二つめの相違点は、「二年、東大寺の大仏供養の時」(七・10)という年代表記があることである。この語は七・13斎所権介成清子、住高野事の文中にもう一例あり(ただし「大仏供養の年」、時代認識としては「近比」に入る話と思われるが、

出来事（東大寺大仏供養）で時代を表示するこのような例は、卷六以前には見られなかった。説話の主題的には、「東大寺の大仏供養」に参った時、「つねよりも信をこりて」理趣分

を一遍よんだことが滅罪に繋がったとあるので、Ⅲの「様々な機縁」話群に入れられるであろう。さらに時代表記ではないが、冒頭語に「東の方修行し侍りし時」（八・五盲者関東下向事）という語句が見られることも、相違点の一つである。

卷六以前の同じような形としては「西行法師、東の方修行しける時」（六・12）があるが、八・5の場合は編者の直接的な体験談として語られている点が異なっている。さらに文中に書かれる時代提示語に「今の世の事なれば、彼別所に知らぬ人なし」（七・13）、「今の事なれば、名はたしかなれど……」（八・2）のように、卷七以降には「今の話」であることを示す文言が見られる。卷六以前では、「むげに近き世の事」（三・9）、「近き世のことにこそ」（五・3）とあって、出来事を「今の世の事」と語る例は見られない。卷七以降の内容については、自己の体験譚も含め、「今の世」「今の事」を入れるという方針があったのであろうか。また卷六以前の文中にある時代提示語は、年代順に矛盾することはなかったが、八・1「中来」と八・3「近世」の間に、文中に「今のことなれば」の語を

持つ八・2があつて、年代順を乱している。これは説話の年代よりも「無き徳を称する」という主題を優先した結果であろう。

このような相違点に対し、説話の内容的には、卷六以前と同様の話が多く、説話構成も卷六以前に収録した話の拾遺的、補遺的な話が多い。既述のように、七・1、七・2に、偉大な先達であり、日本浄土教史上欠くことのできない源信と空也を入れたのは、卷一第一話の玄敏以下の説話群と対応していると言えりし、Ⅱ話群の七・3雅通の話は、卷三の悪人往生譚に類似している。七・5覚能の場合も管弦の話として六・7、六・8の数奇説話に通ずる。Ⅲ話群の「様々な機縁」についても、卷四・五とは異なる機縁（夢に白髪丸・貧報の冠者を見る、母の教えなど）を取り上げているが、一方で七・8道寂の話は、道心を祈った一・5の僧賀の話に類似し、七・9恵心僧都の話は、僧と母の恩愛話として、これも五・14荣好、五・15正算、六・1証空の話に似通う。卷六以前と以後とにこのような類似点が見られるのは何故であらうか。その理由としては考えられるのは、卷七・八以降が卷六以前の拾遺的、続編的なものとして、ある時間的隔たりの後に編纂されたからではないかということである。卷六以前の完結した内容と

卷七以降の拾遺的な内容の相違からは、当初からの構想のもとに続けて編纂されたようには思えない。

最後にⅧ話群について述べておきたい。仮に「神明の思召」という題で括つておいたが、必ずしもこの題に当てはまらない話もある。Ⅷ話群についてはどのように解釈すればいいのかよく分からない。それ以前との内容的関連も、ここに置かれた理由も見出せないのである。Ⅷ話群の話は、『発心集』以前に同類話が見られず、関係の深い往生伝類や『古事談』などの同時代資料にも見えないのである。⁽¹⁹⁾ 概述のように、それ以前の話が、卷六までの内容構成と多少とも関連するのに対し、この話群にはそのような要素がほとんど見られない。八・8、八・9に「憤りを遂げる」、八・10、八・11に「失明」、八・11、八・12に「神明には後世を祈ることが本旨」という繋りがあり、時代提示語による構成も行なわれているように見えるが、内容的な一貫性・まとまりがないのである。八・11、八・12は異本独自説話の一つである恒舜説話の類話であり、これを含む四話の異本独自説話はすべて神祇説話であることから、両者とも『発心集』流传のある段階で取り入れられた可能性を考えている。⁽²⁰⁾ 卷八末の神祇説話は、末尾の跋文風評論との関係も含め、改めて考えてみたいと思っている。

注

- (1) 森下要治氏「流布本『発心集』の内的構造―時代提示語をてがかりに―」(国文学攷 一三六号 一九九二年)
- (2) 志村有弘氏「『発心集』研究序説」(『中世説話文学研究序説』所収 昭和四九年 桜風社刊)、野村卓美氏「『発心集』の時代意識」(『国語と国文学』六一卷十二号 昭和五九年)、森下氏前掲論文。
- (3) 野村氏前掲論文
- (4) 神宮文庫本は「神宮古典籍影印叢刊『西公談抄 発心集和歌色葉集抄書』、素行文庫本は「山鹿文庫本発心集―影印と翻刻付解説―」(新典社研究叢書)の影印を用いた。
- (5) 卷一二二についてみると、一・1話中の三井寺道頭の話と一・7話中の陽範阿闍梨の話は、流布本が無改行なのに対し、異本は二本とも改行している。一・10天王寺瑠璃上人の話に付随する「仏みやうといふ乞食」の話、二・10橘大夫説話に付随するある聖人の話は、流布本・異本ともに改行している。
- (6) 志村氏前掲論文。「一一〇年中葉以降」とあるが、「一一〇〇年代中葉以降」か。
- (7) 野村氏前掲論文
- (8) 新潮古典集成『方丈記 発心集』頭注。同話の「古事談」三六傍注は、当時の伊予国守として藤原知章の名を上げる。知章が伊予在任中の長徳年中(九九五―九九九)に、伊予

- 国の疫癘消除のため、阿弥陀房淨真に普賢延命法・六字河
 臨法を修せしめたという伝承がある（阿婆縛抄・権記等）。
- (9) 野村氏前掲論文。白河院政が、堀河（中比）・鳥羽（近比）
 兩天皇の時代に亘ったことも一因であろう。
- (10) 「近き世」の時代提示語はもう一例五・13貧男好差因事にあ
 るが、説話内容から時代を知ることが困難である。
- (11) 益田勝実氏『火山列島の思想』（筑摩書房 一九八三年）
- (12) 『百鍊抄』安元二年（一一七六）八月十五日条「上人十一人
 入水す。其の中に蓮華城上人と称する者、発起を為す」。
- (13) 藤島秀隆氏「『発心集』における伝承―『今鏡』との関連を
 めぐって―」（『説話物語論集』第三号 昭和五〇年）、山口
 真琴氏「『今鏡』から『発心集』へ―その受容の実態と方法
 ―」（『国語教育』26上 一九八〇年）
- (14) 卷一第12話は、本文中に「美作守顕能のもとに」とあるが、
 表題が「美作守顕能家入來僧事」とあり、内容的にも顕能
 邸という場所と解した。
- (15) 本文引用は、『続本朝往生伝・拾遺往生伝』（日本思想大系）往
 生伝 法華験記（岩波書店）、『今鏡』（河北騰氏校註）『今
 鏡全註釈』（笠間書院 二〇一三年）、『古事談』（新日本古
 典文学大系 岩波書店）による。
- (16) 特に二・4寂照は、『今鏡』においても二・3保胤の後にあ
 り、配列においても『今鏡』を踏襲したと思われる（山口
 真琴氏前掲論文）。
- (17) 『発心集』と関係する往生伝類としては、『拾遺往生伝』（一・
 8六波羅幸仙、二・10橘大夫、三・11親輔養児、四・5肥
 州僧）、『後拾遺往生伝』（二・9助重）、『続本朝往生伝』（三・
 3頼義、四・4叡実）などがある。
- (18) 二・1安居院聖の話と二・2永観の話は、流布本では「隱徳・
 隱居」が主題となっているが、二・1には「臨終善知識」
 の主題もあり、異本では二・2話末に臨終善知識の重要性
 を説く話があつて、この二話には「臨終善知識」という共
 通主題が存在する。李曼寧「『発心集』構成新考（卷一―卷
 三）―水観話の神宮文庫本文を手掛かりに」（『文芸論叢』
 第七九号 二〇一二年）参照。
- (19) 卷六以前同様、卷七以降にも「伝に見えたり」・「伝にあり」
 などとして出典を示す場合がある。例えば七・2（空也・
 日本往生極楽記）、七・3（僧延・法華伝記・百座法談聞書
 抄三月三日）、七・4（賀茂女・続本朝往生伝）、七・11（源
 親元・後拾遺往生伝）。また類話もある（卷七・4揚州人・
 三宝感応要略録中70・言泉集）。しかし卷末の神祇説話につ
 いては、『発心集』以前に同類話が見出せない。八・12に言
 及のある桓舜は『続本朝往生伝』11に見えるが、内容が異
 なる。
- (20) 拙稿「流布本発心集成立試論―神祇説話を手がかりとして
 ―」（『説話論集 第七集』平成九年 清文堂出版、『神仏説
 話と説話集の研究』平成二十年 清文堂出版）。